

「第2回手取川懇談会」の懇談結果(要旨)

○開催日時:平成19年11月12日(月)13:30~15:30

○場 所:金沢河川国道事務所 2F会議室

○議事次第

1. 開会挨拶(蓮見事務所長)
2. 出席者紹介(畠中副所長)
3. 懇談内容
 - (1)平成18年度 調査報告 ~手取川伏没還元調査~
 - (2)平成19年度 手取川事業概要
 - (3)手取川流砂系総合土砂管理に向けた取り組み
4. 閉会挨拶(蓮見事務所長)

○出席者名簿

◇出席者:16名(敬称略・専門分野別五十音順)

氏 名	専門分野	所 属
辻本 哲郎	河川工学	名古屋大学大学院 教授
佐野 修	自然環境(魚介類)	石川県立自然史資料館
富樫 一次	自然環境(昆虫類)	石川県ふれあい昆虫館 前館長
中村 浩二	自然環境(生態学)	金沢大学自然計測応用研究センター 教授
野崎 英吉	自然環境(哺乳類)	石川県環境部自然保護課 参事
古池 博	自然環境(植 物)	石川県自然史センター 専務理事
中川 耕二	地下水・地質	北陸地盤工学研究会 前会長
藤 則雄	地下水・地質	金沢大学 名誉教授
村島 和男	農業土木	石川県立大学 教授
宮崎 光二	内水面漁業	石川県内水面漁場管理委員会 会長
永井 隆一	地域社会	石川県砂防協会前会長、旧白峰村長
西田 耕豊	地域社会	石川県治水協会会長、川北町長
山崎 正夫	地域社会	手取川流域開発期成同盟会前副会長、旧尾口村長
小堀 幸穂	地域経済	鶴来商工会 副会長
三田 薫子	歴史・文化・文芸・教育	作 家
米田 満	歴史・文化・文芸・教育	白山地域自然保護懇話会 座長

◇欠席者

玉井 信行	河川工学	金沢学院大学大学院 教授
鹿島 博史	エネルギー	北陸電力(株)石川支店 技術部長
池本 良子	水 質	金沢大学大学院 教授
高澤 基	報 道	北國新聞社 代表取締役専務
平野 俊也	歴史・文化・文芸・教育	水辺の楽校推進協議会委員長、能美市立寺井図書館長
長谷川孝徳	歴史・文化・文芸・教育	北陸大学未来創造学部 教授

○懇談要旨

(中川氏)

手取川伏没還元調査について、手取川橋辺りから河口までの河床砂礫の下に粘土層があり、それがシートのようにになっている。この地層と地下水との関係を整理してみてもどうか。

平成10年頃を境に手取川沿川の地下水変動傾向に変化があるが、今後の経年的な傾向を見ながら科学的にこの現象を確認していただきたい。また、手取川沿川の地下水採取量や揚水施設の経年変化は、旧寺井町や旧辰口町も含めて整理していただきたい。

出水時に地下水位が上がる現象は、河川水位の上昇に伴うものもあるが、出水時の降雨は堤内地にも降っているため、水田などからの涵養も考えられるので、多角的に見ていただきたい。

秋口の同時流量観測で、上流部(鶴来)と下流部が還元、中流部が伏没という結果がきれいに出ており、周辺の地下水との関係が明瞭に現れていると思う。冬場の同時流量観測では、自然流量が多く上手くデータが取れなかったとのことだが、年間を通じて中流部は伏没区間であることで間違いないと思う。

(小堀氏)

近年、水田が住宅や畑に変わってきて、水田が減少してきているが、農業用水の取水量は、水田面積などの変化によって見直されているのか。また、水の濁りについて今回の議題にはなかったが、今後調査検討を進めていっていただきたい。

(事務局)

農業用水などの取水量について、適時見直しをかけており、至近年では、平成17年度に水田の減少に伴い減量しています。また、濁水問題については、現在も定期的にデータ収集をしており、濁質供給源の特定やその抑制対策の研究を進めていきます。

(富樫氏)

オオミズギワカメムシは手取川の河口部が日本で唯一の生息地であったが、かつての河川敷での公園工事で絶滅してしまった。また、手取川では昔、砂地に昆虫が巣を作っている状況が多く見られたが、現在ではほとんど見る事が出来ない。その中でもカワラハンミョウは、かつて市ノ瀬から、美川まで生息していたが、現在では美川の海岸で少し見つかるだけとなってしまう、そのハンミョウに寄生する「ツヤアリバチ」とう蜂もいなくなってしまった。さらに、ハラビロハンミョウの生息域の北限は石川県で手取川の河口にも若干生息している。

このため、手取川の河原を普通の状態(石の河原)に維持していただきたい。また河川

工事に当たってはこれらのことを十分留意していただきたい。

(三田氏)

川は生活する人があってこそ息づき、川による人材育成がなされているかどうかは大事な要素となる。そこで、未来の子供達の夢とロマンを育てたいという思いから「手取川文化圏の確立」を提案したい。水辺の楽校の一環として「手取川子供科学探偵団」を結成し、「手取川から未来の学者を生み出そう」をスローガンとして、生物、水質、化石研究など実体験を伴う川を生きた教科書とした、子供達の目が輝くようなメニューでプロジェクトを組み、子供達の旺盛なチャレンジ精神を育てたい。

(米田氏)

海岸侵食の問題に対して、手取川からの土砂供給は大事な事だが、現在の手取川から出てくる土砂の粒径は細かく、かつてのような粗い土砂は流れてこない。このことは、海岸への土砂供給という意味で矛盾があるのではないか。

(事務局)

手取川の河床を構成している平均的な粒径は3cm～10cm程度であるが、海岸へどのような粒径の土砂が流れているか、砂浜にどのように寄与しているかは分かっていない。今後、海岸へどのような質の土砂を流せば良いのか調査研究していく。

(中川氏)

海岸については、河川からの土砂供給だけではなく、土砂を補足するための沖合施設も必要である。

(古池氏)

手取川は近年低流量化しており、中州が固定化し樹林化するなどの問題が顕在化している。流砂系の総合土砂管理は大事な問題だが、川というのは水とともに土砂も流れないといけない、安直に土砂をトラックで不足する箇所に運搬するということではなく、土砂を川に流すことをしっかり考えて欲しい。

(事務局)

我々も土砂管理については問題意識を強く持っている。技術的に難しい面もあるが、皆様方のご意見を頂きながら、少しずつ望ましい方向に進んでいきたいと考えている。

(永井氏)

桑島地区の飛砂対策について、現在のような土砂を掘削して貯水池内の上流部に運搬するだけでは恒久的対策にはならない。今後は土砂を手取川第2ダム下流部に運搬しておき洪水時に流出させるようにして養浜対策もかねるか、村長時代に検討したことがある百合谷堰堤を可動堰を設置すればどうだろうか。可動堰は、平常時には堰を建てて湛水させ飛砂を防止し、出水時には堰を転倒させて水を流す構造で、工事費が1億強で施工できると試算した。この可動堰と土砂撤去を比較検討してみたいか。

(辻本氏)

まず地下水について、手取川扇状地の地下水、伏流水は重要でいろいろな事を多面的に考えなくてはいけない。今回の調査で全ては分からないと思うが、データをどういう目的で使用するかによって整理の仕方が変わってくるので、何をどうしたいかという軸をしっかりとさせたほうがよい。例えば河川水を増やして農業用水を減らすと、場合によっては地下水への涵養源が減少して地下水位が低下するかもしれない。河川の正常流量を検討する上でも単に伏没量分を上乗せするというのではなく、このようなことも踏まえ河川流量と地下水位の戦略的な管理という視点から検討してはどうか。

この会は整備計画をフォローアップする会であるので、整備計画のどの部分が現在進行中で、それが将来どのように繋がるかという位置づけを整理して欲しい。

水辺の楽校などの総合学習は、実際にやるのは住民や学校の先生になると思うが、周辺のNPO、住民、他の機関がどうサポートするのか、またそのための基金をどうするのかといったことを国土交通省が主導的に話をし、まとめ上げサポートしてあげて欲しい。

総合土砂管理について、山から海まで土砂を流すということは重要であると認識されてきたが、どの辺りをどんな材料が流れているのかが分かっていない。しかしながら洪水時に手取川を通過している土砂の量の把握が重要であり、それを知らないと話が始まらない。例えば白山合口堰堤で、洪水の時に土砂がパッシングする土砂量を計測してみたいか。